

「Re: リ・コロンの質的心理学フォーラム」では、学会の活動や大会での話題、本誌の論文や記事などに対する「再論」や「再提起」を通して、対話を深めていきます。今回は、第15号特集の再論です。



「現場」を問い直す

● 意見論文+企画者から ●

意見論文
①

状況に埋め込まれた学習の触媒たるものたち
Catalysts for Situated Learning

横山草介 東京都市大学人間科学部
YOKOYAMA Sosuke Department of Human Life Sciences, Tokyo City University

キーワード：アカ／ファン、学習の触媒、出現するフィールド
Key words: aca/fan, catalysts for learning, appearing fields

● コンヴァージェンス・カルチャーというフィールド

ジェンキンス (Jenkins, 2021/2006) は、(1) メディアの異種混交性、(2) ファンの参与可能性、(3) コンテンツの流通可能性の3点の絡まり合いによって構築される新たな文化の動態をコンヴァージェンス・カルチャーと呼んで定式化した。韓国の7人組アイドルグループ「BTS (防弾少年団)」のファンたちが、BTSの社会的な活動や彼らの楽曲を触媒としながらBTSのファンコミュニティである「ARMY」の成員としてのアイデンティティや活動を公にしていく姿を描いた千田・岡部 (2023) の論考は、まさにジェンキンスの

言うコンヴァージェンス・カルチャーの1つの「現場」を捉えようとしたものである。

上で触媒という言葉を用いたのには理由がある。ファンたちの実践如何によってアイドルの活動や作品自体がそのスタイルを大きく変えるわけではない。だが、彼らの活動や作品のスタイルがファンたちによる新たな文化的実践の創造と結びついている。このとき、アイドルの活動や作品は新たな文化的実践を生み出す触媒として機能していると言える。本論では、それ自身は大きく変化しないが触発的に新たな文化的実践を生み出す契機となっているような物事を「触媒 (catalysts)」と呼ぶことにしたい。以下では触媒という包括的なパースペクティブによって千田・岡部の論考

の見通しを明るくしつつ、現場と研究との奥深い関係について3つの観点から検討を行う。

● Aca/Fanとしてのフィールドワーカーの死角

千田・岡部（2023）の論考の1つの特徴は、当の研究の担い手自身もまた BTS のファンコミュニティである ARMY の成員であることを自認しているということであった。先のジェンキンス（2006）は、学術研究の対象としてのフィールドに参与する研究者であると同時に、自らもまたあるファンコミュニティの成員であるようなフィールドワーカーの存在を Aca/Fan と呼んだ。彼はアカデミズムが構築する言説とファンダムが構築する言説とは交流することのないそれぞれに独立した言説空間であるか、あるいは、交流することがあっても、それらはしばしば対抗的な言説空間を生み出すことになってきたという。その上で彼は、学者としてのアイデンティティとファンとしてのアイデンティティの両方を自認する Aca/Fan の存在は、これらの無関係性や対抗言説を乗り越えていく存在として重要であると主張する（Jenkins, 2006）。

千田・岡部（2023）の論考においてもこうした視点が暗に共有されている。論文の第一著者である千田は1人の Aca/Fan として自らも ARMY であることによって、研究協力者である ARMY の成員たちが語る言葉や実践の内実を彼らの実感に近いかたちで理解し、記述する。だが同時に、高い当事者性を持つもの同士のやりとりは、ときに実践を語る言葉のいくらかを暗黙の了解としてやり過ごしてしまう可能性をつねに含み込んでいる。言い換えれば、フィールドに分ち持たれたユニークな実践の特質を可視化する試みを、高い当事者性がかえって不可視にしまうリスクをつねに内包している。この意味において Aca/Fan としてのフィールドワーカーには、自らが当事者であるが故に暗黙の了解として見過ごしてしまいうようになる当の実践のユニークさを、ときには当の実践に馴染みのない者の視点を取り、未知の世界への探索として掘り起こしていく作業が求められる。では、当事者としてフィールドに参与する Aca/Fan が自らの参与するフィールドを未知の世界として探索するためには何が

必要なのであろうか。そこに必要なのは、実践の内側にいる者の視界と、実践の外側にいる者の視界とを交流させることによって、実践の内側にいる者たちの暗黙の了解による見過ごしに歯止めをかける作業であろう。千田・岡部（2023）の論考が共著論文として発表されているという事実の背後にこうした試みが為されていることを期待したい。

● 出現するフィールドから展開するマルチサイトド・エスノグラフィ

千田・岡部（2023）の論考における重要な指摘の1つに、フィールドは所与のものではなく出現するものである、との指摘がある。「現場」を問い直す、と聞けば多くの読者は「〇〇の現場」として具体的に指し示すことのできる時間的、空間的に縁取られた場所をイメージする。言わば「現場」を所与のものとしてイメージしようとする。だが、千田・岡部（2023）の論考においてフィールドとして語られているのは、ARMY たちが BTS の発言や活動、彼らをめぐる報道を触媒として Twitter 上に ad hoc に開設するスペースや、BTS のメンバーによる「投票認証ショットチャレンジ」を触媒として、おもむろに新大久保駅の交差点に集まって選挙への投票を呼びかける ARMY たち、ひいては BTS の作品や発言を触媒に変容した自己や自己を取り巻く身近な人たちとの関係といったものである。これらの例はいずれも現場というものを所与の特定可能な場所としてイメージする因習から抜け出し、現場というものを ad hoc に、連鎖的に出現するものとして位置づけ直す試みとして理解することができる。

研究のフィールドを時間的、空間的に縁取られた特定可能な場所として固定的に捉える発想に囚われていると、フィールドの在り方に深く関わっていても、当の縁取りの周辺に位置づいているような諸現象を見落としかねない。フィールドは所与のものではなく、出現するものであるという発想の転換によって、フィールド研究の視野は拡張される。この含意のもとに千田・岡部（2023）の試みを、出現するフィールドという発想から展開されたマルチサイトド・エスノグラフィ（multi-sited ethnography）の1事例として読む

こともできる。

● ファンを「降りた」とき、「学習」は どうなるのか？

千田・岡部 (2023) の論考から引き出される最後の論点は、BTSのファンを「降りた」とき、彼らの学習はどうなるのか、という問いである。

千田・岡部 (2023) は、BTSのファンを自認するARMYたちが、BTSの作品やメッセージを一時的に享受、消費するばかりではなく、BTSの作品やメッセージを触媒とすることによって、自己や自己を取り巻く身近な関係に変化を与えていく様子を描きだしている。彼らはこの過程に「学習」という営みが伴われていることを強調する。ここで彼らが強調する学習は、単に個人に何らかの知識や技能が獲得されていくことを意味するものではない。彼らが学習と呼んでいるのは、個々のARMYたちがBTSを「推す」活動を介して、自己や身近な関係を変容させていく過程や経験そのものである。学習をこのような営みとして捉え直そうとするとき、そこには他者やモノ、場所を含め、学び手の学習を支える様々なリソースが動員されていることが見えてくる。まさに学習という営みが「状況に埋め込まれた (situated)」(Lave & Wenger, 1993/1991) ものとして立ち現れてくる。千田・岡部 (2023) の論考におけるARMYたちもまた、TwitterやSNS、インターネット、ARMY同士のネットワーク、BTSの作品やメッセージ、新大久保駅界隈といった無数の場に潜在する多種多様な学習のリソースを再編、加工しながら自らの学びをデザインしている。

同時に気掛かりなことは、これらの学びはいずれもBTSを触媒としなければ成立し得ない、ということである。BTSのファンを自認するARMYたちは、BTSの活動やメッセージを触媒として日常的、社会的に、ときにポリティカルとも呼ばれ得る実践に参加するようになる(千田・岡部, 2023)。その過程で自身にとって新たな実践が営まれ、自己や自己を取り巻く社会的関係の変容を伴う学習が経験される。だが、これらの経験はいずれもBTSの活動やメッセージが触媒として十全に機能していることが前提となる。では、BTSのファンを自認するARMYたちがBTSの

ファンを「降りた」とき、彼らの学習はどうなるのだろうか。人の学習を状況に埋め込まれたもの、社会的関係に分かち持たれたものとして捉える見方は、学習が社会的関係によって支えられていることを明らかにする一方で、状況や社会的関係が変化したときに、当の状況や社会的関係のもとに成立していた学習はどうなるのか、という問いを引き寄せる。

状況的学習理論は、学習という営みを個人に帰属させる見方への批判理論として展開してきた側面がある。そのため、この立場を徹底するとき、状況や社会的関係の変化は学習の帰属先の清算、すなわち、当の関係のもとに成立していた学習の一旦の白紙化を意味することになる(高木, 1999)。状況や社会的関係の変化によって学習が清算されることはない、と主張するためには、当の関係のもとに成立していた学習を帰属させるための個人、ないし別の社会的関係という観点を導入する必要がある。例えば、あるARMYがBTSのファンを「降りた」あと何らかのポリティカルな活動に参加し続けるとき、ARMYを自認していたかつての自身を想起することによって実践の継続が為されるのかもしれない。あるいは、かつてそうであった自身を知る者が、実践の継続へと繋ぎとめる役割を果たすのかもしれない。いずれの仮定においても、ARMYであったときの学習が白紙化されないとするなら、かつての自身についての記憶という個人の観点を導入する必要を生じる。状況的学習理論に基づく立論はこの点に課題を残している。

● 結語

本稿では、『質的心理学フォーラム』第15号の特集『「現場」を問い直す』に掲載された千田・岡部 (2023) の論考を頼りに現場と研究との奥深い関係について3つの観点から検討を行った。以下、本稿が提起した論点を整理する。

1つ目の論点は、高い当事者性を持つもの同士のやりとりは、ときに実践を語る言葉のいくらかを暗黙の



了解としてやり過ぎしてしまう可能性をつねに含み込んでいるが、そうしたやり過ぎをいかに精察するか、ということであった。

2つ目の論点は、研究における現場というものを所与の特定可能な場所として固定的にイメージする因習から抜け出し、現場というものを ad hoc に、連鎖的に出現するものとして位置づけ直す試みの重要性であった。

3つ目の論点は、人の学習を状況に埋め込まれたもの、社会的関係に分かち持たれたものとして捉える見方は、学習が社会的関係によって支えられていることを明らかにする一方で、状況や社会的関係が変化したときに、当の状況や社会的関係のもとに成立していた学習はどうなるのか、という問いを引き寄せることになる、というものであった。そしてこの問いを巡っては、状況に埋め込まれた学習の帰属先をめぐる状況的学習理論に固有の課題が残されている。

引用文献

- 千田真緒・岡部大介 (2023) ファン活動としての現場研究——BTS ファンダムの共感的フィールドワーク. 質的心理学フォーラム, No.15, 16-25.
- Jenkins, H. (2006) *Fans, bloggers, and gamers: Exploring participatory culture*. New York University Press.
- ジェンキンス, H. (2021) コンヴァージエンス・カルチャー——ファンとメディアがつくる参加型文化 (渡部宏樹・北村紗衣・阿部康人, 訳). 晶文社. (Jenkins, H. (2006) *Convergence culture: Where old and new media collide*. New York University Press.)
- レイヴ, J. & ウェンガー, E. (1993) 状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加 (佐伯胖, 訳). 産業図書. (Lave, J., & Wenger, E. (1991) *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge University Press.)
- 高木光太郎 (1999) 正統的周辺参加論におけるアイデンティティ構築概念の拡張——実践共同体間移動を視野に入れた学習論のために. 東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要, 10, 1-14.